



山本・堀アーキテクト

堀 啓二

文京区役所一ひろば

1957年 福岡県生まれ
 1980年 東京藝術大学美術学部建築科卒業
 第3回学生設計優秀作品展
 1989年 (株)山本・堀アーキテクト設立
 2001年 工学院大学工学部建築学科
 非常勤務講師
 2004年 共立女子大学家政学部生活美術学科
 助教授

「街にひろく」

インタビュー：共立女子大学 城所 有希子/桑沢 香織
藤村 美貴子

小学生の頃から絵を見たり描いたりするのが好きで、ひたすら絵を描いていました。高校の時、オリンピックの代々木体育館を見て、一生に一度ああいうもの建てられたらいいなと思いました。そして数学も好きだったので、絵と数学の融合しているものとして建築の道に進みました。

—— 当時、影響を受けた建築家はいますか？

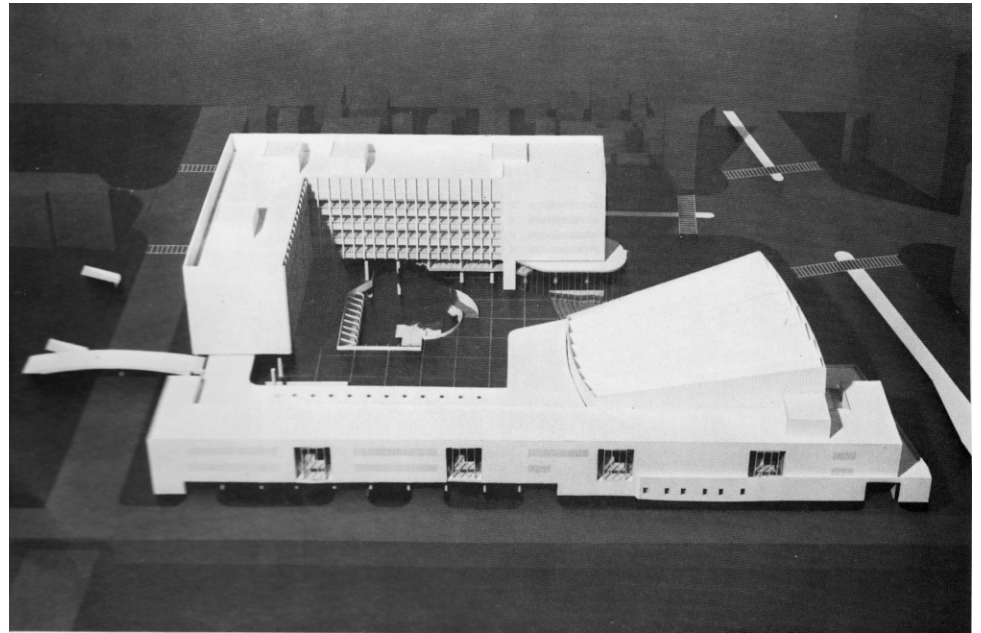
アルバ・アアルトとルイス・カーンです。アアルトは、自然の素材感や荒々しさみたいなものをやわらかく建物に取り込んで環境を十分生かし、自然と一体となっているところが好きです。カーンの建築はあるシーンを見ているような感じで、光がきれいだったり、そのためだけに様々な造形が出来上がっています。更に将来対応のできるような設備スペースがあったりと非常に物事をきちんと捉えているところも好きです。

—— 卒業設計について教えてください。

卒業制作は文京区役所の建替え計画です。その頃の区役所や地方自治体は非常に暗く閉鎖的でした。ヨーロッパに行くと、とても気持ちがいいところがあります。例えばアアルトのセイナツァアの村役場は中庭があり、周りに執務室がついています。そこに行くと、人が中で活動している様子が見ることができます。上手く見る見られるという関係をつくり様々なアクティビティが街に表出し、自治体と街が一体になるものをつくりたいと思いました。更に、日本の街は一種の道の空間であり広場という空間があまりないのでそういう空間を取り入れようと思いました。それはピロティ空間、大階段、ブリッジなど内部空間へ自然に入ってこれるような道の延長としての広場空間がつくれなかつたかと考えました。

—— 卒業設計と現在の関係はありますか？

生活をいかに街に開き、密接に関わるかという視点は、その頃から変わっていないし、建築とはそういうものであると思います。人がそこに介在することによってその空間があり、それが生きるかどうかはそこにいる人間の関わり方次第だと思います。やはり最後は、そこに住む人達がどう街を



卒業設計写真

感じるか、どう建物を感じるかということなのです。私はそういう視点から建物を見ているし、特に公共施設にとっては重要だと思います。それは住宅にしても同じことで、閉じる住宅ではなくてやはりどこかにきちんと開く場所があるべきです。昔の住宅は第二の玄関とも言える縁側があり、そこでは井戸端会議ができ、日々の光の移り変わりも見れたり、畳に寝っ転がれたり自然を感じながら過ごすことができました。人と外との関わりは学生の頃から一貫したテーマです。

—— 現在、興味があることは何ですか？

小学校をやりたいです。小学校は低学年から高学年というように成長の過程でまったく別の世代が同じ空間にいることに興味を感じます。昔の小学校は校庭を開放するぐらいでとても閉鎖的な空間でした。今も防犯のこともあり、かなり閉じる方向にと考えがちです。しかし、子供達は街の人達と共にあるべきです。僕の子供の頃は街には様々な職業の人達が住み、そこを訪ねながら遊び、街の人達とコミュニケーションしていました。街自体が学校のようになっていました。学校は街と接していくような空間をつくるべきです。教室や特別教室を開放していたりと、街と接点をもちながら空間はできていくと思います。それはどのような建物でも同じです。住宅や大学でも人

と人がどうそこで生活するか、その生活がどう街とコミットしていくかとか。やはりそこに興味があり、そういうことを小学校でやってみたいと思います。

それから大学で教えているので、学生と街づくりが出来るといいと思います。

—— 現在、興味があるアーティストはいますか？

グレゴリー・コルベールです。彼の作品は映像的で、ほんのコンマ何秒のシーンから様々なシーンが見えてきます。一瞬の空間を捉えていて、ここからどうなるのだろうと想像が膨らみます。すると一枚の写真から空間が広がってきます。

—— 学生に一言お願いします。

建築だけではなく、興味をもって色々なところに行って色々なものを見て下さい。それをスケッチをするなりしていつでもそれをきちんと自分の中で分析をして、記憶にとどめておくようにして下さい。そしてそれを人に伝える様にしてください。



2005年 大東文化大学 写真提供/山本・堀アーキテクト